

(別紙の2)

自己評価及び外部評価票

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己 外部	項目	自己評価(事業所記入)	外部評価(評価機関記入)	
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営				
1	(1) ○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている。	地域との交流がコロナの影響により途絶えてしまっている。地域の方からは「早くそちらに伺って皆さんの顔が見たいね。」との声をいただいている。職員にも見える位置に基本理念は掲示してあり共有している。	玄関ホールに来訪者と打ち合わせができるコーナーが設置され、その横に法人理念とホーム運営方針が掲示されている。職員は出勤時に確認するようにしている。ホーム運営方針の柱である【地域との連携を図りながら…】について「早くコロナ以前の状態に戻れるように準備をしたい」と管理者・職員から話が聞かれる。	
2	(2) ○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一人として日常的に交流している。	コロナの影響により地域との交流が取れていない。地域による行事も中止となっており、交流の場はないが、散歩などで姿を見かけた時には挨拶をしている。	【おたっしやカフェ】等、地域との交流が盛んに行われてきたが、コロナ禍で「サルビアにコロナウイルスを持ち込んではいけない」と地域の方の気遣いから現在ほとんどの交流が中止になっている。事業所の様子をお知らせして関係を繋げられるように、地域の回覧板と一緒に事業所の広報誌も回覧してもらうよう職員が届けている。	
3	○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている。	グループホームで行っている認知症カフェもコロナの影響により開催できず、地域に向けての発信ができていない。今後はコロナの状況の中でどのように地域に向けて情報を発信していくかを工夫していく必要を感じている。		
4	(3) ○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、その意見をサービス向上に活かしている。	コロナの影響により運営推進会議を書面にての開催としている。集合形式ではないため、意見交換が難しくほとんどできていない。	コロナ禍のため、現在 書面開催になっている。本年度4月・6月・8月の報告内容を書面で確認し、避難訓練の実施状況・面会状況・感染対策やホームの取り組みの様子が報告されている。管理者より「意見交換の重要性を感じ集合形式での開催に早く切り替えていきたい。」との話が聞かれる。	
5	(4) ○市町村との連携 市町村担当者とは日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる。	不明な点や疑問点は市の高齢福祉課に確認しながら行っている。また、事故報告や、運営推進会議の実施報告も行っている。地域包括支援センターとも連携を図りながら情報交換を行っている。	直接市町村との連携はグループホーム単独としての機会は少ないが、必要時は電話連絡や訪問をして相談連携を図っている。市の派遣(介護)相談員の来訪も中止となっている。運営推進会議参加者の「河西部地域包括支援センター」とは密接に連携を行い、行事等で協力いただいたり、情報交換や相談を行っている。	
6	(5) ○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる。	研修や会議での話し合いにより理解は出来ていると思われる。人員不足の時や入れ替わりが多く落ち着かない時は玄関の施錠をしてしまう現状がある。	原則、身体拘束を行わないケア方針は「利用契約書」に記載し説明と同意を得ている。訪問当日は、夏祭り行事で職員の見守りが手薄の為、玄関が施錠されている。現在、夜間の転倒、転落防止にセンサーコールマットを使用している入居者が1名。外すことを前提に検討しながら、夜間のみ部分的使用として運営推進会議に状況報告していることを議事録で確認する。法人全体の身体拘束廃止委員会も毎月開催され職場会議で報告周知している。	

自己	外部	項目	自己評価(事業所記入)		外部評価(評価機関記入)	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている。	研修での学びを活かし全職員で意識を持ち努めている。言葉使いで気になる点などがある時は個別に話している。指針の整備を行っている。			
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している。	自立支援については学ぶ機会もあるが、成年後見制度についての学びは少なく勉強不足である。			
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている。	主に管理者が行っている。契約時にはひとつひとつ読み上げながらの確認を行い、質問にも答えている。			
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている。	職員に伝えられた意見は管理者にも報告し、会議の場で話し合い、共有している。家族や入居者から出た要望に関しては可能な限りは実現できるよう話し合っている。	コロナ禍のため、地域交流会と家族会を兼ねて行われる施設行事の中止や面会制限の中、家族や地域からの意見や要望を直接伺う機会が少なくなっている。窓越しでの面会や電話連絡時、サルビアだより配布時等に意見や相談を伺うよう意識している。現在、家族の希望者対象にZOOMでの面会を検討していると管理者から話がある。現在、職員は意識的に入居者との会話をゆったり多く行い、思いの把握に努め会議で話合っていることを管理者や職員の対話で確認する。	グループホームは家庭的な環境で職員との日々の関わりが大切な生活支援となっている。職員の異動や新規職員についてのお知らせは、家族にとってホームと一緒に協力体制をつくっていく上で大切な情報となる。今後の「ホームだより」の活用を期待します。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている。	職員との面談の時には聞くように心掛けている。普段の会話の中で意見・提案を言いやすいような関係づくりを意識しながら接している。	計画的に年数回の面談が設定されており職員との意見を聞く機会となっている。毎月のグループ会議の前に話し合ってもらいたい議題があれば、用紙に書いて事前提出し会議で検討される仕組みが整っている。一例として会議時間の見直しについて職員より意見が出され参加しやすく経費削減につながっていることを管理者、職員との対話で確認する。		
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている。	年に数回面談も行き、代表者などと直接職員が話す機会を設けている。認知症に関する理解や各自の向上心を持ってるように指導することはこれからも課題だと思われる。			
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている。	コロナの影響により集合での研修が行えない状況が多くある。OJTについては職員の入れ替わりもあり不十分だと感じる。			
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている。	コロナの流行が見られてから、他施設との交流が行えていない。			

自己	外部	項目	自己評価(事業所記入)	外部評価(評価機関記入)	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている。	新規に入られた方には、本人との関わりを通じて得られた情報を記録に残し、職員全体で共有している。必要な時には都度職員で検討し、本人にとっての安心を考えている		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている。	主に管理者が行っている。契約時や事前の申込みの際に直接話しをしながら聞き出せるように努めている。入居してからは職員もご家族の声を聞くようにしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている。	本人や家族と面談を行い、どのような暮らしを希望するのかを確認している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている。	一緒に食事の盛り付けを行ったり、掃除、洗濯ものたたみを行ったりしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている。	コロナウイルス感染予防の為、面会の制限はあるが、面会時には本人の様子をご家族に伝えたり、動画で見ていただく等している。変更や体調面で変化など見られた時には家族にも相談している。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている。	コロナウイルス感染予防の為、外出など制限があり、なじみの場所に行ったりできず、なじみの人も面会がなくなっている。入居者によってはなじみの美容院に行って髪を切ったりしている。	コロナ禍の中で家族との外出や馴染みの店への買い物等は、家族対応で「美容院」へ通われている1人の方以外は現在できない状態である。可能な状態になったら、「外出の機会や、顔なじみになっている地域ボランティアとの交流を計画していきたい。」との管理者から話が聞かれる。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者が同士の関わり合い、支え合えるような支援に努めている。	会議の場で入居者についての話し合いを行い、入居者同士での関係性を築いていけるよう努めている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている。	隣の施設に移られた方のところに関係性のあった入居者様をお連れしたり、つながりを持ち続けていけるように努めている。		

自己	外部	項目	自己評価(事業所記入)		外部評価(評価機関記入)	
			実践状況	実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント						
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している。	入居者の声も記録に残しながら、本人の意向を把握するようにしている。本人主体の暮らしができるように努めている。	ケアカンファレンス前の入居者への聞き取りや、日常生活の関わりの中で聞かれる希望や意向、コミュニケーションが難しい方の表情や家族からの情報提供を受け、定期的また必要時に検討しケアプランに取り入れている。(生活把握の24時間シートにも記録されている)		
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている。	入居する際にご家族にこれまでの生活歴などをわかる範囲で記入してもらい、職員で回覧し把握に努めている。また、本人から聞いたことも記録に残すように努めている。			
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている。	一緒に過ごす中で気付いたことを記録に残し、情報共有している。その方の出来ることを探すようにも努めている。			
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している。	定期的話し合い、介護計画の見直しを行っている。	前出の本人の意向、定時見直しカンファレンス前の家族の意向確認や、定期的訪問がある協力医・機能訓練指導員、訪問看護、歯科指導等の意見を職員が把握し検討し介護計画を見直ししている。		
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている。	1ケア1記録に努め、日々の様子や関わりの様子などを記録に残し、情報共有に努めている。			
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる。	出来ないと決めつけずできそうな事柄については一度行ってみて検討するように努めている。			
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している。	コロナウイルス流行時から地域との関わりが取れない中で、地域資源の活用もできていない。			

自己	外部	項目	自己評価(事業所記入)		外部評価(評価機関記入)	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している。	本人の状態により、家族、訪問看護師と話し合いを行い、受診が必要と判断すれば適切な科に受診している。	現在、かかりつけ医の希望の方はおりませんが、ホームの協力医が内科医月1回、精神科医月2回、訪問看護週1回、歯科衛生月2回の定期訪問があり、連携し早期対応が可能な体制を図っている。ホームと協力医の専用メール連絡で早期の対応や、こまめな連絡体制ができています。		
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している。	体調で気になる点等あったら看護師の訪問時に確認している。急を要することに関しては都度連絡している。			
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院した際はご家族とも連絡を取りながら対応している。病院との話し合いには管理者が同席を求められた場合に対応している			
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所ですることができることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる。	契約時に重度化対応と終末期の指針を示し、同意を得ている。その際にも、重度化した場合等相談する機会を持ってもらうように説明している。	入居時と、必要に応じて本人と家族への意向確認を行っている。本人の状態が大きく変化した時は、本人・家族に現状を説明し今後の生活環境について話し合いを行う。最近、家族の希望でホームでの看取りを行った。グループホームは看護スタッフが常駐していないため、職員と医師と訪問看護師の細部にわたる連携が重要になると管理者から話がある。夜間一人で勤務する職員への精神的負担を管理者がしっかりフォローしている様子を職員との対話で確認する。		
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている。	マニュアルは作成してあるが、訓練までは行っていない。			
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている。	年2回避難訓練を実施している。(内1回は水害想定) 地域の方にも参加を呼びかけ、協力をいただいている。(コロナウイルス流行後からは職員のみで実施)	避難訓練は法人全体で年2回計画的に実施され、6月に第1回が行われた。コロナ禍の前は地域との協力体制も役割分担があり訓練もできていたが、現在は法人内職員のみで行っている。管理者との対話の中で、2019年10月の長野県千曲川の豪雨災害を教訓に、法人での避難方法の見直しを行い、現在は水害想定の水害避難の訓練も行っている。訓練状況は運営推進会議にて報告を行っている。(会議録にて確認する)		

自己	外部	項目	自己評価(事業所記入)	外部評価(評価機関記入)	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている。	認知症とひとくりにするのではなく、一人の人として捉え、対応に努めている。	運営方針である「我がままに暮らせるように…」を職員は意識して取り組んでいる。日々入居者の心身状況が変化中、その状態に合わせ職員が交代したり、連携して穏やかな生活につながるようになっている様子を職員の対話から確認する。また、職員の日ごろの言葉かけや対応について、管理者はじめホーム職員が意識して取り組み、課題を出しながらサービスの向上に繋げていることを管理者との対話で確認する。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている。	自己決定につながるような声かけに意識し、普段の関わりの中から本人が思いを伝えやすいような関係性作りに努めている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している。	役割なども入居者に無理強いせず、本人のペースでお願いするようにしている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している。	髪分け目などにこだわりがある方もいる為、整髪など自分でできることは行ってもらっている。服も自分で選べるような声掛けに努めている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている。	好みの把握に努め、好きな人にはコーヒーなども提供している。食事の準備、片付けも行える方を中心にお願している。	昼食は、法人内の調理部からの配食があり、栄養バランスの取れたメニューとなっていて、職員も一緒に昼食をとる。朝食と夕食は入居者の要望を聞きながら職員がメニューを考え、定期的買い物に出かけている。現在は、買物はコロナ禍で職員のみとなっている。訪問日も夏祭りの行事でテーブルを中央に寄せ、職員と入居者が法被姿で屋台メニューを手造りし和気あいあい参加されている様子が見られる。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている。	食事量、水分量は記録して情報共有している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている。	歯科往診で見てもらいながら、指導してもらっている。毎食後の口腔ケアは自分で磨ける方には行ってもらい、磨き残しを職員が仕上げ磨きを行ったりしている。		

自己	外部	項目	自己評価(事業所記入)		外部評価(評価機関記入)	
			実践状況	実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている。	排泄チェック表を用いて情報を共有し、間隔や時間の見直しを、会議でも議題として話し合いながら検討している。個々の状態に合わせての排泄支援を行っている。	9名の入居者の内、現在6名の方が自立でトイレに行かれている。3名の方はその方の排泄パターンを見極め24時間シートに基づき、おむね2～3時間おきのトイレ誘導等を行っている。また、快適な排便につながる工夫として毎夕食時、職員手づくりの野菜スムージー(ジュース)が提供され排泄関係の改善取り組みが行われている。		
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる。	PTから便秘改善の体操を教えてもらいながら実施している。寒天や、オリゴ糖を用いて便秘改善に取り組んでいる。			
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている。	入浴は曜日の指定はせずに、2～3日間隔で声を掛けている。入りたくないと言われた時は無理に勧めず、違う日に声を掛けている。	ホームでは、入居者の入浴日指定がなく、その日に入浴したい方や必要な方、入浴ケア一覧表で入浴間隔を確認し声掛けしている。現在の課題は、「この半年間位の間に介護度4の方が多くなり重度の方の入浴方法を検討する段階になってきている。」と管理者から話が聞かれる。	今後も入居者の重度化が予想される中、重度の方も快適に入浴できる浴槽の改善や重度の方の入浴技術の研修を検討され、どの方もゆったり快適に入浴を楽しめる環境整備の検討、取り組みを期待します。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している。	居室で休みたいと言われる方には横になって休んでもらっている。日中に散歩し、メリハリのある生活の中で睡眠につなげられるように努めている。			
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている。	内服薬については医師に状態を報告、相談しながら処方してもらっている。状態に変化など見られた時は医師、訪問看護師に相談している。			
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている。	日中天気の良い日には散歩に出かけ、気分転換を心掛けている。何か役割を行いたい方にはできそうな役割をお願いしている。月一回お楽しみ会を行っている。			
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるよう支援している。	散歩に行きたいと言われた時は一緒に出るよう努めている。普段出かけられないような場所には行けていない。	コロナ禍のため、家族との外出もできず、現在はホーム周辺の散歩に出かける状況となっている。「今後は地域や家族支援を受けながら外出を考えていきたい」と管理者から話が聞かれる。	ホーム外の外出支援がままならない中、利用者の方に、実際に買い物を楽しむや選ぶ楽しみのある生活感覚を体験してほしいと思う。管理者の方も話されていた”梓の郷アットホームだより”に掲載されていた移動販売車等の活用について検討を期待します。	

自己	外部	項目	自己評価(事業所記入)		外部評価(評価機関記入)	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している。	お金は職員の管理にて行っている。ほしいものがある時には個人のお金で買い物をしている。			
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている。	電話を掛けたいと言われることはほとんどないが、家族からの電話で本人と話したいと言われた時はつなぐようにしている。入居者の中には携帯電話で話している方もいる。			
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている。	空間としては不快が無いように配慮している。テーブルに設置している感染予防のためのアクリル板があることで入居者には混乱や不快が見られている。	コロナ禍で制限のある中、利用者の方とゆっくり会話したり居室やリビングを拝見する時間は持てませんでしたが、管理者の配慮で、入りロドアから日常生活の会話や表情を拝見する。リビングは広すぎず狭すぎず3人~4人が集えるテーブルが入居者の行動や好みに配慮され、数か所に置かれている。窓を開けると隣接する保育所さるびあから園児の声が聞こえ、ホームの窓の外には花畑がつけられている。入居者の重度化や地域との交流ができない中、畑作りが困難になり、入居者と職員の発案で季節感を見て感じられる花畑にしたと管理者との対話で伺う。壁には入居者の共同作品「花火」の貼り絵などが季節感を感じられるように工夫して飾られている。		
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている。	テーブルを3か所に分け、テレビ前にはソファも置き、気の合った者同士で過ごせるようにしている。玄関フロアには椅子が2か所あり、一人になりたい時はそちらに行かれる方もいる。			
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている。	本人、家族と相談し、以前から使っていた家具や、馴染みのものを持ち込んでもらっている。	洋室6部屋と和室3部屋でしたが現在は和室2部屋になり、その方にあつた使いやすい部屋に改良している。遠くから和室を拝見する。日差しがカーテン越しに入り、明るく衛生的で落ち着いた環境になっている。管理者との対話で自宅から使い慣れた家具や食器類を持参される方が多いと伺う。		
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している。	トイレは一人できるが場所がわからないという方に対しての工夫が必要である。			